

立教と観光教育の関わり史

—観光研究所50周年に寄せて—

立教大学名誉教授 元観光研究所所長 前田 勇

皆さま、おはようございます。ご紹介いただきました前田です。本日、立教大学観光研究所開設50周年を記念して開催されますシンポジウムの冒頭に、少しお話をさせていただきます。私の話は、観光研究所ができてからの50年ではなく、なぜ観光研究所ができたのか、総長が先程おっしゃったように、どのような経緯で立教大学は観光教育・研究を特徴とするようになったのかについてお話させていただきます。観光研究所が設立されてから今日までの歴史については、後ほどパネルディスカッションでお話をしてくださることと思います。

私はこの研究所ができましたときに、現役の所員でしたが、これからするお話は大変に古い、約100年近く前の話です。そのとき私は生きていたわけではありませんけれども、年長者でございますので、比較的そういった古いことを知っているというだけのことでございます。どうぞよろしく願いいたします。

皆さまご承知の通り、立教は、明治7(1874)年に創立され築地に開校をいたしました。実は

その1年前の明治6(1873)年に、当時の明治政府がキリスト教の信仰・布教を長いこと禁止しておりましたのを解きます。そして、外国人が定められた居留地の外へ出掛ける、つまり旅行をすることを認めたのです。このことが、実は立教大学と観光教育との関わりを知る上で、重要な歴史的出来事となります。「立教と観光教育との関わり史」を紐解くためには、このことから話を始めなければならないと思います。

これからパワーポイントを使いながらご説明させていただきますが、その中でいろいろな方のお名前が出てまいります。恐縮ですが、表記上、敬称は省略させていただいておりますことをあらかじめご了承くださいませよう願っています。

1. 「ホテル講座」開設の背景

金谷家について

最初に出てまいりますのが、金谷善一郎という方です。この方は日本の観光・ホテルの歴史

を語る上で忘れてはならない大変重要な人物なのですが、今日のお話の主人公ではございませんで、この方のおふたりのご息が主役となります。長男の方が日光金谷ホテルの経営に当たられ、次男の方は箱根の富士屋ホテルの経営に関わられます。この次男の方が後ほど主役となります。金谷善一郎さんは、東照宮に雅楽の演奏家の1人としてお勤めになっておられ、「笙（しょう）」という楽器を演奏されていたようです。東照宮の雅楽演奏家たちは、徳川家の家臣になるわけで、東照宮に勤務していました。もともとは徳川幕府から俸禄が出ていましたが、幕府が崩壊すると給料は出なくなり、家計が苦しくなりました。金谷善一郎さんは、大変広い家を持っておられましたので、家計のために、自宅を利用して、学者や宣教師をはじめとした在日外国人の方たちを対象に部屋貸しをするようになったということで、これが重要なポイントとなります。

金谷家に滞在した外国人

当時日本にいた学者や宣教師、その両方を兼ねている、宣教師と同時に学者であるという方も多いのですが、いろんな方がおられました。その中で大変有名な方は、クララという奥さまと一緒に来日しておられた、宣教師のヘップバーンという方でした。この方の名前は、ヘップバーンなのですが、日本ではこれをヘボンと読んでしまいました。この方をご存じのとおり、「ヘボン式ローマ字」を提唱した方で、正しくは

ヘップバーンですが、日本では、ヘボンと呼んでいたわけです。この方は、後に明治学院大学をつくられましたが、奥さまのクララさんはフェリス女学院をつくったということをご存じの方も多いかと思います。このヘップバーン（ヘボン）が金谷家に泊まっていた。

金谷家に滞在した外国人として最も有名なのが、旅行作家イザベラ・バードという方です。この方は、当時の日本の観光を語る上で非常に大事な人物です。彼女はイギリス人で、当時47歳でした。実は病気を持っておりまして、その病気のために転地療法がいいということで、あちらこちらと旅行していました。そして明治11（1878）年、開国してまだ間もない日本を訪れるを試みます。彼女は、5月から11月まで6カ月をかけて、東京から東北を通って、北海道まで行って、帰りは船で帰ってくるという旅をいたしました。実はこのことが重要な意味を持っておりまして、彼女は旅先から毎日のように手紙を書き、そしてその手紙を、母国イギリスにいる妹さん宛てに送っています。日本は当時国際郵便の協定に入ったばかりでしたが、外国への郵便ということで国の名誉がかかるということで、丁寧に間違いないように扱われたことが幸いして、彼女の出した手紙のほとんど全てが届いているのです。イギリスにいる妹さん宛てに送った手紙には、全部番号と日付が付いておりまして、これを後に整理して本にいたします。この本は大変貴重な旅行記録として、いろんな国で出版され、日本でも

後に出版されています。この資料は、立教と観光教育の関わりを見ていく上でも、大変大きな意味を持っているということが言えるわけです。重要なのは、彼女が金谷家に2週間近く滞在したときの記述です。彼女が書いたことでとくに印象的なのは、金谷さんがお金をためて外国人向けホテルを持ちたいと考えているということが書いてあることです。金谷さんは明治6年から外国人の方を泊めているのですが、非常に早い時期から、ちゃんとしたホテルを作りたいと言っておられたということです。

イザベラ・バードという方は、大変几帳面に細かなことを全部記録しています。その中で彼女は、「金谷氏は礼儀正しい教養ある人物で、大変素晴らしい日本人だ」と言っています。その次に、お庭、調度品、食器などすべてが素晴らしい。日本は素晴らしい精神、文化を持っている。収入がないので、紹介状を持ってきた外国人に限り部屋を貸していたということなど、非常に几帳面に書き記しております。食事として別注文で注文した卵は1個いくらだったというようなことまで書いています。はっきりしたことは難しいのですが、卵は当時高くて、私の計算では、現在の価格で1個400円ぐらいに相当すると思います。

日光金谷ホテル開業

ここで少し時代を飛ばさせていただきます。先ほどから十数年過ぎました。1892年に、金谷家の長男の真一さんが立教学校へ入学されます。

1874年に築地に開校された立教学校です。そして、お父さんの善一郎氏が念願のリゾートホテル、日光金谷ホテルを明治26（1893）年に開業するに至ります。実はそのことをよくご存じのご関係の方も多いかと思いますが、日光金谷ホテルはもっと前に、明治6（1873）年に開業しているといわれることがあります。金谷ホテルが掲げている旗にも、明治6年、1873年開業というふうに書いてあります。それはなぜかといいますと、先ほど言いましたヘップバーン（ヘボン）が、「全部一挙にホテルにするのではなくて、ここにはみんなが集まる食堂、ラウンジを作ればよい。周りの空いている部屋を借りて、そこに泊まって、食事のときだけみんな集まるという方式にしたらどうか」というアドバイスをしたのが1873年だったとされているからなのです。このアドバイスを受けて外国人を泊めるようになったのが金谷ホテルの始まりだとホテル側は主張しているわけです。しかし、私の見解からでは、明治6年のときに、外国人をいつも泊めるような施設を作ったというのはちょっと当たらないと思うのです。あくまでも要望のあった時だけ部屋を貸していたにすぎないのだということで、私は1893年説を取っています。ただ、もっと古いところにルーツがあるということを主張されるのはそれなりの根拠があれば結構ですが、無理にこじつけるのは適当ではありません。

(補注)

「日光金谷ホテル」の開業時期や営業形態(常時営業・臨時開業など)については、さまざまな解釈や意見があり、さらに“カッテイジ・イン形式”の採用を勧めた人物に関しても異なる意見があることは事実で、前田はこれらについて、次のように記載している。

金谷真一氏が晩年にまとめた『ホテルとともに七十五年』(金谷ホテル・1954年刊)の中で、“カッテイジ・イン開業に至る出来事”として次のように記載されている。

◎明治5(1872)年頃、日光を訪れた外国人が旅館から宿泊を断られ困っているのを見て(自宅を提供した。その結果として)金谷善一郎は勤務先の東照宮に処罰されたとのこと。

◎翌年(1873年頃?)6月、以前に宿所を貸した外国人が夫人を伴って訪れ、夏の宿所として貸してほしいとの申し出があり承諾する。

◎さらにその翌年(1874年?)、当時英国公使を務めていたパークスらの要人が訪れるようになったため、近隣家屋を借用して“カッテイジ・イン形式”を採用することになった。

このように、金谷真一氏の著書を手がかりにすると、“カッテイジ・イン形式”採用は明治7(1874)年以降のことであり、またヘボン(ヘップバーン)の名前はとくにあげられていない。

実は「1873年6月、ヘップバーンの指導(助言)により……」との説明には無理があるとの意見がある。それはヘップバーンはクララ夫人とともに1872年10月から73年11月までアメリカに帰国しており、日本不在であったと年譜に記載されている。それ以上に、当時は本格的辞書『和英語林集成』の再版に取り組むとともに、聖書の日本語訳に取り組んでおり、さらにキリスト教禁令が続いた時期に、個人旅行のために日光を訪れたとは考え難いことによる。なお、金谷真一氏が父親

善一郎氏から聞いた話として述べていた、日光を訪れた外国人を自宅に泊めた件で東照宮から処罰をうけたことについて、興味を持たれた後の金谷ホテルの社長が当時の書類を調べられ、「そのような記録は見つからなかった」と結論づけられていることも判明している。

当時、金谷家には英国大使館関係者をはじめ、キリスト教布教のために来日した宣教師・教師など、さまざまな人が訪れていたことは確かなことである。

(前田 勇 [2003]「立教観光教育略史」『立教大学観光学部紀要』第5巻、pp.148-168)

立教と金谷家のつながり

金谷家の長男の真一さんは立教へと進まれません。学校の記録をみると、立教に入学されたのは1892年のことでした。翌年、お父さんは念願のホテルを開くわけですが、長男にはそれを手伝ってほしいという思いが強かったのでしょうか。そこで「築地にある立教に行きなさい、外国人のお客さまに対応できるようなホテルを作るのだから将来のために外国語を勉強しなさい。」という思いで送り出したというのは素晴らしい決断だと思います。ご子息の真一さんも一生懸命勉強したと記しておられます。晩年になりまして、話した内容を記録した本があるのですが、その中で、「在学中は真面目に勉学に励んだ」と言っておられます。実は非常に驚くべきことに、そのことが100年近く後になって事実であることが判明します。ご存じの方もおられるかと思いま

すが当時築地にあった立教は大きな地震の被害を受けました。いろんなところが壊れてしまうのですが、それを修理する過程で、真一さんと同級生たちは、100年後に向けて、今で言うところのタイムカプセルを作っているものを入れました。その中に入っていたのは、学生名簿、そして成績表や証明書関係、そして当時の切手とか新聞とか、そういうものを入れて封をして、100年後に開封することで夢を託したのです。

その後立教は池袋に移りますけれども、そのときにそのカプセルもそのまま保存されて移動していたのです。そしてそのカプセルが、ほぼ100年後に見つかり開かれることになったのです。1999年、今から20年近く前の夏に、そのカプセルを開けることになりました。この開けた時のことは、当時の新聞に詳細な記録がありますので、ご関心の方は、ぜひそれをご覧になるとよろしいかと思えます。大変細かく記載されております。学生名簿と成績記録、それから校舎の写真と当日の新聞、当時の記念切手なども入っておりました。カプセルを作ったときの2年前が1892年ですがその年は、コロンブスがアメリカに到達して400年記念の年だったので、アメリカでは400年記念切手というのが発行されているのですが、それがたくさん入っていました。立教大学の中で、それらを公開していたこともあり、それをご覧になった方もおられるかと思えます。今ここに飾られているのかは知らないのですが、こういうことがありました。その中には、真一さん

の成績表もありましたが、ほとんどが満点に近い成績でした。本当に一生懸命勉強していたという事実が証明されたということでした。

富士屋ホテル

ここで富士屋ホテルに話が移ります。日光とともに日本を代表する観光地である箱根宮ノ下にある富士屋ホテルが登場してくるわけです。今でも富士屋ホテルの前は、1月の2日、3日の箱根駅伝のときに、コースが大きく曲がる場所ですので、行きと帰り、必ず映りますのでご存じの方も多いかと思えます。富士屋ホテルの歴史は、先ほど社長の勝俣伸さんからご案内がございましたが、山口仙之助という方が開業したものです。1871年、岩倉使節団が出発した年ですが、アメリカ渡航を目指していた山口仙之助さんは、日本にはおいしい牛肉がないという話を聞きます。日本にある牛肉は農耕用、労働力としての牛の肉なのでおいしくないとのことで新しく牛を買ってきて、日本人も牛肉を食べるようにしたほうがよいということを知って、「よし、将来日本をそういう風にするぞ」ということで、有り金全部をはたいて種牛を買って帰国したという話です。7年後に、宮ノ下にあった老舗の、字が違うのですが藤屋という日本旅館を買収して洋風に改造して、外国人専用施設富士屋ホテル、現在の名前のもに変わります。これが明治11（1878）年のことです。くしくも、この年は、先ほど登場したイザベラ・バードが金谷邸に滞在したときと同

じ年です。たまたまのことですが、このようなこともありました。

山口(金谷)正造氏と富士屋ホテル

先ほどお話がちょっと出てまいりました金谷ホテルと富士屋ホテルとの関わりですが、金谷家の次男正造さんは、真一さんの3歳下の弟ですが、正造さんもまた立教へ進学されます。語学と柔道、銃剣術というのを得意にしておられ、卒業後、世界一周を目指してずっと外国を旅されました。イギリスには長期滞在され、外国語が得意だったようです。帰ってこられた翌年1907年に、山口仙之助さんのご長女のお婿さんとなられ、以後山口正造として富士屋ホテルの経営に取り込まれるわけです。正造さんは大変外国の経験が豊富で語学も達人だったわけですが、何よりも、ヨーロッパ等のホテルをたくさん見てこられたということがありました。その経験を生かされて日本のホテルにそれまでなかったことを次々と取り入れていくということをされるのです。

正造さんが富士屋ホテルに取り入れたものには大きく分けて2つありました。1つは、『We Japanese』という日本を紹介する記事を英語で執筆して発行します。毎日朝食のときに出すメニューの裏に、日本はこうなっている、日本にはこんなことがあるのです、といったことを簡単に書いたもので、ご自身で英語で書いて、それを刷り込んで、泊まっているお客さまに配るというこ

とを続けました。日本に関する新しいニュースを提供するというのを1930年から始められました。これが大変好評でして、それを後でまとめて1冊の本にして販売したところ、飛ぶように売れたということです。日本の記念にという方が多かったようです。今から20年ほど前にそれを複製しています。当時のものを本としてまとめたものが売られており、入手することができます。

もう一つは、ホテル実務学校の開設でした。これも勝俣さんからご紹介がございました。開設年度が1年違いますが、1929年、いずれにしても昭和の初めに、自ら校長として開設しまして、実務を中心に3年間研修し、ホテルの実務を実際に自分で経験しながら覚えるということをしていたわけです。残念ながら、間もなく戦時体制に入って中断してしまいます。実は、この後、だいぶ飛びまして、1991年のことですが、その復活とでも言いましょうか、外国から研修に来られる人たちを受け入れるということに取り組んでおられます。正造さんは、当時のホテルではやっていなかったことを取り入れただけでなく、将来のことを考えて人材育成にも取り組まれたわけです。戦後すぐのときに、日本のホテルというのは大変苦勞した時代がありましたが、その時代に活躍された人は、この富士屋ホテル学校出身者が多かったと言われていました。

金谷ブランド

お兄さんのほうの日光金谷ホテルと、弟の正

造さんの富士屋とを合わせて、ここでは金谷ブラザーズと呼ばせていただきたいと思いますが、金谷ブラザーズのおふたりは明治期から大正期にかけて、日本のホテル事業を引っ張るという役割を果たしてこられました。お兄さんの真一さんは、日光でお父さまと一緒に金谷ホテルの経営に取り組み、その他にホテル業界の役員なども多数しておられることが記録に残っています。弟の正造さんは、富士屋ホテルの経営に携わりながら、一時、帝国ホテルの総支配人を依頼されるなど、ホテル業界のリーダーとして随分活躍をなさったようです。

それからもう一つ、鬼怒川のホテルも出てきます。それは鬼怒川温泉まで東武鉄道が延長された時期に、鬼怒川にホテルを作ることになり、日光でホテル経営の実績のある金谷家をお願いすることになります。それで、実はこの金谷ブラザーズの下のお姉さんと結婚されたお婿さん、その方が鬼怒川温泉ホテルの始まりを作ります。鬼怒川のほうは金谷ホテルとは言わず、鬼怒川温泉ホテルというふうに呼んでおりました。ずっと後、戦後になって、駅のすぐそばに鬼怒川金谷ホテルができました。実は最近になりますが、日光金谷ホテルグループ再結末のニュースが流れました。ついこの間ですが、2018年1月9日の日本経済新聞の記事に、金谷グループ3社、3社というのは日光金谷と鬼怒川にある金谷系のホテルと、もう一つ金谷ブランドのパンの製造販売をしている金谷ホテルベーカリーという会社が

あるのですが、その3つが結束して金谷ブランドをもっと強化してやっていこうじゃないかということになったという記事が出ておりました。皆さまも、これからも注目していただきたいと思っています。大きな勢力になるのではないかと思います。

2. 「ホテル講座」開設

「ホテル講座」開設の経緯

さて、ここで立教大学ホテル講座の開設に話を進めたいと思います。先ほど勝俣さんからのお話の中にございましたが、大活躍しておられました山口正造さんは、惜しくも平和がよみがえる直前に病没してしまわれます(1944年)。平和になって間もなく、「正造記念育英会事業」というのが始まることになり、1946年に正造さんのご遺族と日本ホテル協会の方が立教大学を訪ねてこられました。当時立教大学は幸いにして戦災は免れておりましたけれども、本当に何もない、キャンパスががらんとしている状態でしたが、正造さんのご遺族が故人の遺志を継いで、母校の立教大学でホテル関係の人材育成活動を続けてもらえないかということをお申し出になられたと伺っております。大学側はそれを受け入れ、やりますと返事をいたしました。これは大変な英断だったと思います。詳細を詰めた結果、翌1947年の4月から、毎週2回、午後2時間講義をするという形で進めるということになりました。

面白いのは、他の大学の学生、そして社会人も受講を認めていた点です。オープンスクールの先駆けでした。今は珍しくはありませんけれども、当時は非常に珍しい講座だったと思います。2年間で修了するわけですが、正式な講座という意味で、立教大学から修了証を授与することも決まりました。1947年の4月から開講することになったわけですが、ただ、1つ問題がありました。皆さん、現在とは全く違うことをまずご理解いただきたいのですが、当時日本にあるホテルはほとんど全てが、アメリカをはじめ連合国が全部接収していました。箱根の富士屋ホテルもそうです。日本人が使えるホテルはなかったのです。ホテルの講座をやるといっても、どこで何をどうするんだという問題を考えると大変難しいことでしたが、やりましょうということを立教大学は決めたわけです。素晴らしいことです。1952年にサンフランシスコ平和条約の発効によって日本が独立を取り戻した後は別ですが、これはその前のことです。このことをご理解いただきたいと思います。

大坪 正先生

実は一番大きな問題は、教室は焼けていないのでありますが、教える先生はどうするのかという事です。それがなんと、当時この人以上の人は日本にいないだろうという方が立教におられたのです。本日まで出席の方の中にはご存じの方もおられると思いますが、大坪正先生という方

でした。この方は佐賀のご出身ですが、東京外国語大学から京都大学を経て鉄道省に入省されたという、現在言うところのいわゆるキャリアで、将来は鉄道次官までいく可能性のある方でした。国内でホテル事業に一生懸命取り組まれ、外国研究員としてコーネル大学でホテル事業論を学ばれます。コーネル大学の名前を知っていたとしても、コーネル大学で実際に学んだという人はまだほとんどいない時代に、この方はコーネル大学で勉強しています。その後、鉄道省を辞められ、ヤマトホテルという会社に移られます。ヤマトホテルというのは実は国策ホテルでして、当時日本が進出していた満州の特殊権益を持っていた、国が運営しているのと同じような鉄道会社のホテルです。「満鉄」といわれていたところが運営しているホテルでした。

満州は非常に広いんですが、満鉄はそこに世界でもトップクラスの列車を走らせようとしていました。現在の新幹線の基になったといわれていますが、大連とハルビンの間、900キロある距離を、時速80キロで走る特急列車、「あじあ号」という名前が付けられていた列車を運行していました。当然のことながら食堂車がありました。

大坪先生は、ヤマトホテルで列車食堂を運営する責任者を務めておられました。知識として持っているだけではなくて、実務経験もおありだったという方が、なぜ立教におられたのかは、今でも謎です。戦争直後で住宅事情が非常に悪く、佐賀に帰られる前に住むところがないので、

知り合いの関係で大学の一角に住んでおられたという話らしいのですが、はっきりしたことは分かりません。いずれにしてもその方がおられたということはまさに奇跡のような話です。

聖路加国際病院

それでホテル講座が始まり、カリキュラムのほうは何とか作ることができました。ホテルの歴史や設計、経営、調理、会計などの科目がありました。ただホテル衛生については、もともと発生が同じですので、立教と関係の深い聖路加国際病院の院長先生にお願いしました。聖路加国際病院の先生たちは戦争中、軍医をされて戻ってこられていました。

後に、聖路加国際病院の院長を務められた方が、2017年に105歳で亡くなられた日野原重明先生です。先生は現役の院長の後、名誉院長、運営体の理事長をずっと長いことしておられまして、大変なご高齢で亡くなられるまで活躍しておられました。

ポール・ラッシュと清泉寮

余談になりますけれども、皆さんはポール・ラッシュという方をご存じでしょうか。実は（清里）清泉寮、そして聖路加国際病院に非常に関係がある方です。ポール・ラッシュ（P.F.Rusch）は宣教師として1925年来日されましたが、翌年からは立教の英語教授として活躍されました。日米関係が悪化してからも長いこと頑張っておられましたが、とうとう強制送還されてしまいます。そして戦後すぐにGHQの一員として日本にこ

られて、日本の教育制度を指導するなど、いろいろなことをなさった方です。そして、この方が、清里高原で農業に従事する人たちを育てるための施設を作りました。これが（清里）清泉寮で、立教大学はここで立教キャンプを開催していましたのでご存じの方も多いかと思います。1970年代以降になりますと、清里は高原の原宿なんて言われるようになり若い人たちが大勢集まってきた、清里の名物は清泉寮のソフトクリームだといわれるようになりました。ポール・ラッシュという方は、山梨県ではとても有名でして、清里を作った人として映画まで作られているくらいです。池袋キャンパスと通りを隔てた向こう側、立教池袋中学・高等学校があるほうに体育施設があるのですが、その施設の名前はポール・ラッシュ・アスレティックセンターといいます。ずっと聖路加国際病院の広報課には清泉寮に連絡する窓口がありました。立教、清泉寮、聖路加にはこのような関係があるのです。なお、清里は周辺の町村と合併を繰り返して、現在は北杜（ほくと）市となっています。余談になりましたけれども紹介させていただきます。

「ホテル講座」の展開

ホテル講座が始まった頃は大変な時代でして、食べ物もろくにないような時期だったのですが、それでもホテル講座にはたくさんの人たちが集まってきました。本当に驚くべきことです。そして2年後、1949年の3月に、所定の回数を受講され

た15名の方が最初の修了者として証書をもらっておられます。第一期生の方々の中にはいろいろな方がおられました。まず鈴木博さん。後に帝国ホテルで活躍されまして、その後には大学の先生もされた方です。ご存じの方も多いかと思えます。初期の時代にホテルの会計に関する本を執筆しておられます。それから原勉先生。この方は立教大学から、日本ホテル協会に勤務され、後に立教大学社会学部観光学科の教授とられた方で観光研究所の所長も10年間お務めになりました。日本ホテル協会というのは、ホテル業界全体を連絡させ、そして活動を活発にするということを実施する組織です。鈴木さんや原先生はホテル講座の運営にも関わられました。実は大坪先生が亡くなられた後、今度は集団で、みんなで集まって委員会方式で運営しようというときに、その中心となっておられたのが原先生でした。それから福田實さん。この方は、伊香保の老舗日本旅館「福一」という旅館を経営してこられた方です。福一は、武田信玄の時代、戦病者の病院代わりにしたという大変古い歴史を持っています。お二人のご息も立教大学社会学部を卒業され、旅館業界のいろいろな役職を務められるなど、親子で旅館業界の発展に非常に貢献されました。

このような方々がこの講座受講生から出ておられます。

「ホテル研究会 (ホテ研)」

もう一つ忘れてならない活動団体として、「ホテル研究会」があります。ホテル講座が開講して2年目を迎えた1948年4月に、講座を受講していた学生が、講座で知識を学ぶだけでなく、研究会をつくって実践活動をしようということ呼びかけました。少しずつですが、ホテルで実習する可能性も出てきていましたので、呼びかけに賛同した人たちによって、大学の文化会登録団体の1つとして、立教大学ホテル研究会がスタートしました。結成後間もない5月の5日・6日の2日間、立教のホテル研究会(ホテ研)は早くも大学祭に参加しています。日本ホテル協会が作っておられる資料に、「大坪講師指導の下、コーヒー店の実習を公開す」という記録が残っています。珍しいことが始まったということで、非常に注目をされたようです。この後、立教にホテル研究会ができたというニュースを聞いて、他の大学にもホテル研究会をつくる動きが出てまいります。多くの学生の方が講座では勉強、そして研究会では実習をするということで、両方に参加して活躍する方がたくさんおられました。今日、後ほどシンポジウムでスピーカーをなされます小田真弓さんも、ご主人とともにホテル講座を受講し、そしてホテル研究会の会員として両方で活躍された方でございます。立教大学のホテル研究会は、実はホテル実習のほかにも、観光地の現地調査などもしていました。その結果を報告書として発表するという活動をしていた

のですが、当時は今と違って観光地の現地調査をした資料などはほとんどありません。ホテル研究会がつくった報告書がどういうルートを経由したのかはわかりませんが、古本屋に売られていて、かなり高い値段が付いていたということがありました。そういう大変貴重なものをまとめた時代がありました。

実はもう少し後、観光学科ができた時の話ですが、「立教さんにどうとう観光学科ができましたね」「おめでとうございます。立教はホテ研がありましたからね」と外部の人によく言われました。知っているのはみんなホテ研なんです。それは学生のクラブですよと言うのもだんだん面倒くさくなったものですから、「そうですね」と言うようにしていたんです。とにかくホテ研の知名度は抜群、そしてその次がホテル講座、そして一番知名度がないのが観光学科というような感じでした。現在の順番はどうでしょう。少し観光学科がよくなっているかもしれませんが……。

社会学部観光学科の設置

だいぶ時間がたってまいりましたが、いよいよ次が観光学科の設置という話です。これは前の東京オリンピックが開かれた1964年の話です。その開催を契機として、日本にも4年制大学の中に、ホテルや観光に関する学科をつくるべきだという声が一気に高まります。そして、歴史と実績のある立教大学がこの要望に応えるのが望ましいということで意見はほぼ一致しておりました。

このような要請に応えまして、設置に向けて動き出すわけですが、大学の中にも文学部、経済学部、理学部などさまざまな学部があり、法学部もできたわけですが、その中でも社会学部が一番柔軟性があるのではないかということで、社会学部にそれをつくったらどうかということになりました。設置準備委員会を作り、学科新設の申請などの活動に取り組みました。間もなく分かったことがあります。それは、ホテルはともかく、観光に関する理解というのが、当時はかなり低いということでした。前のオリンピックの時ですからまだ非常に低かったです。観光というのは金持ちがやるんだろうとか、まさに物見遊山そのものでして、あまり関心がない。これが、社会の関心がないのならともかく、学科を作ろうという大学の中で関心がないのです。観光学科ができるなんてとんでもないという声が圧倒的なのです。冗談じゃないということで、まず内堀を埋めない限りは何もできないのではないかということで、そこでアメリカをはじめ世界各国では、観光関係の学部・学科を持っている大学がたくさんあり、こんな活動をしているのだ、このようにやっているということの資料を集め、それを印刷物にしていろいろな関係者に配りました。まず学内に理解してもらうことに取り組みなければならなかったのです。

実際の作業はなかなか大変でしたが、これに中心になって取り組まれたのは、後ほどスピーカーを務められます岡本伸之先生でした。当時

岡本先生は大学院生という立場だったのですが、非常に細かな資料をたくさん集められ、役立つものをつくられました。岡本先生は、ホテル講座の受講生で、ホテル研究会では委員長をなさいました。そして後に観光学科の先生になられたというただ1人の方なのです。後ほど登壇になります。

観光学科設置の経緯ということで、皆さんにはあまりご関心のないところかもしれませんが、はじめは順調に進んでいましたが、問題が出てきました。「ホテル観光学科」という名称では認めていけないということなのです。いろいろ論議していくうちに時間がたっしまい、結局認可が先送りになってしまいました。しかしながら、実はこういうような学科をつくるということ自体に反対なのではなく、問題は名前だということがわかりましたし、現在ある学科の中のコースとしてなら来年からつくってもよいということになりました。ちょっと面白いというか不思議な話ですが、学科の設置に先立って、1966年の4月に産業関係学科内にホテル・観光コースが設置されるといふ不思議な形になりました。

名前は結局観光学科ということになりました。なぜホテル観光学科では駄目だったのかということなのですが、実はこれにはなかなか難しい問題がありました。現在と違って当時は、4年制大学の学科名に片仮名を使ってはならないというルールがありました。さらに別の問題がありました。当時、私も教員でしたが、本当に若僧で何

もわかっていなかったのですが、後になってわかりました。いろいろな名前には、それぞれの役所によって縄張りがあるのです。それぞれの役所が、その名称を専ら使うということなんです。ご専門の方が多いのでご存じでしょうけれども、「ホテル」という名称は、実は厚生労働省の用語なのです。なぜかというと、日本の場合、宿泊施設は旅館業法で規制されており、この旅館業法は厚生労働省が所管している法律なのでして、ホテルというのは旅館業の中の一業態なのです。そういうことで、ホテルという名前を使うのはまずいという意見があったようです。なるほどそういうことかと思いました。非常に難しい。観光というのはご存じのとおり鉄道省から始まって、現在は国土交通省が使う言葉なんです。観光というのは旅行一般ではなくて、その中の国際というものとの関係があるからということで国土交通省の使う言葉になっているということのようです。だからホテルなんかも国際なんかという法律に基づけば国土交通省の所管になるという、非常にややこしい話があるようです。医療という厚生労働省の使う言葉なので、他の省庁は勝手にそれを触ることはできないということになっているわけです。いろいろとあります。レジャーという言葉は最近あまり使われませんが、これは歴史的に言うと、現在の経済産業省、かつての通商産業省が使う言葉でして、レクリエーションというのは文部科学省が使う言葉です。そんなこともあって、なかなか勝手に使うというわけ

にはいかないということだったようです。最近になって、年をとって霞が関の不思議ということが少しわかってきました。

ともかく、名称は社会学部観光学科となりました。実は少しややこしいのですけれども、先ほどお話ししたように、学科ができる前にコースができたわけですが、そこに入っていた人たちをどうするのか、ということになります。学科開設時には2年生になっているわけですが、全員編入するというのでいいですか、と学生に聞いたら、最初から観光学科に入りたかったんだからそれでいいですよ、とのことでしたので、次の年に全員が観光学科に編入ということになりました。1967年春になり、観光学科が開設されると同時に、2年生と1年生がいるという状態になったのです。そのため第一期生は、1970年に卒業することになりました。学科開設から4年を待たずに卒業生を出すということで、通常とは1年のずれが出たわけです。

観光学科をご存じのとおり、その後ずっと続きまして、そして先ほどお伝えしたように1998年からは観光学部になりました。観光学部が開設されたときには、社会学部観光学科の学生は2年生から4年生までが在籍していましたが、年次が進み社会学部観光学科の学生たちが順次卒業した後は、すべて観光学部の学生になりました。

観光学科が誕生した1967年にはもう一つ大きな出来事がありました。国際連合がこの年を

国際観光年に指定したのです。スローガンは、「観光は平和へのパスポート」という言葉で、皆さんご存じかと思います。言葉は結構知られたのですけれども、国民の関心はほとんどなかったように思います。このときにいろいろなイベントを催したのですが、観光というものに興味関心があまり示されず、積極的な取り組みを行うのは難しかったということが言えるのかもしれませんが。そういう意味では、先を見てやったということで非常に意義深いことなのかもしれません。

3. 観光研究所の誕生

設置からの50年間

いよいよ観光研究所が設置された年になります。先ほど東所長のご挨拶の中で触れておられましたように観光学科が設置されると同時に観光研究所ができることになりました。そうなったのには、大きな理由があり、実は当時文部省からの強い要請がありました。4年制大学で日本最初の観光学科という教育組織がスタートしたのですが、同時に研究推進並びに今までやってきた講座を統括する機関を設けることが必要であるということになったのです。

このような強い要請があり、観光研究所が設置されました。観光研究所は、学科のように事前に準備をしたというよりも、研究推進と講座運営のための組織をつくることを要請された結果として誕生することになりました。この後のこ

とは皆さまもよくご存じかと思いますが、ホテル講座は何度か名前が変わりましたが、ずっと今日まで継続をしております。現在では「ホスピタリティ・マネジメント講座」という名前で開講されております。このほかにも講座が開設され、後ほどパネラーとして登場されます岡本先生、安島博幸先生をはじめ、各分野の専門家の先生方に講師として参画していただくようになって、専門性を高めてきているということ、私も外から見ていると強く感じています。以前のように入門コースとしての講座から、だんだんと専門講座になってきているように思われます。

この50年を振り返りますと本当に社会は大きく変わってきました。先ほど申しましたように、観光学科と観光研究所ができた年は国際観光年だったわけですが、まさに国際観光の本格的な始まりの年だったと言ってもよいのかもしれませんが。1965年には、日本人で外国に行った人は26万人、観光に行った人は15万人しかいませんでした。この頃は外国へ観光に行く人は少なかったのです。国際観光年までにもっと増やしましょうということで、67年には42万人になりました。20年後の87年には、これから日本も海外旅行をどんどんしましょうということで、91年までに外国へ行く人を1,000万人にするという目標を掲げました。「テン・ミリオン計画」といいました。当時は、そんなこと言ったら無理だよという人もおられたのですが、日本の経済成長と海外旅行が非常に便利になってきたために、目標より

も1年早く90年に達成し、その後も増えていきました。2012年には1,850万人近くまでいったのですが、現在はやや伸び悩んでいて、1,600万～1,700万人台くらいのところで推移している状態です。現在はインバウンドに関心が集まっていますが、1967年に外国から来られたのは47万人、観光目的の方は27万人でした。それが近年大きく伸びてきて、現在も増加をしています。速報値ですが、去年はなんと2,870万人近い数になったということです。大変大きな規模になったと言えると思います。本当にこの50年間で観光は大きく変わり、その存在感も大きくなったと言えると思います。

観光研究所の過去、現在、未来

最後になりました。観光研究所の過去、現在、未来ということでございますが、現在までの積み重ね、いろいろなことの積み重ねがあって今日があるということです。先ほど申しましたように、私は、観光研究所ができるまでのところのお話を中心にさせていただきましたけれども、本当にいろいろなものの積み重ねによってそこに至ったことを感じています。多分に偶然が重なった結果であると思いますが、そこには1つの流れのようなものがあり、その流れに向かっていろいろなものが結び付いていったのではないかと感じています。先ほどお話ししましたように、いろいろなことがありました。金谷善一郎さんは非常に開明的といえますか、外国人を受け入

れるということを始められました。何よりも、おふたりのご子息を、外国人宣教師が始めたできたばかりの学校に行かせて将来に備えるという、素晴らしい教育投資をされました。大変先見性が高かったと思います。長男の真一さんは日光を世界的な観光地にされて、父親の期待に十分に応えられたわけです。一方、富士屋ホテルを舞台に活躍された次男の正造さんは、国際観光の振興と、そして将来の人材育成ということにも非常に熱心に取り組まれました。そして、その正造さんの遺志を継いでほしいとの願いに立教大学が応じたということ。私は細かなことは聞き及んでおりませんのでわかりませんが、それ自体大きな英断であったと思います。しかもそのときに、それを可能にしてくれる方がおられた。なぜその時に大坪先生が立教大学におられたのかはわかりませんが、そのことはとても大きなことでした。そしてスタートした後、専門分野のそれぞれの人たちがどんどん参加されるのですが、忘れてはならないのは、食べるものにも困っているような時代に、新しく始まるホテル講座に青春の夢を、将来をかけようということで集まった立教大学をはじめ、いろいろな学校の若者たちがいたことなのです。これも非常に不思議なことだと思っています。

なにか大きな力がそういう一定の方向に向いて働いていたのではないか、そんなふうに思うわけです。私はチャプレンではありませんから、神様の偉大な力うんぬんという言葉はあえて避け

たいと思いますが、何か非常に大きな力が立教大学に観光教育を担い、育て、守っていくというミッションを与えたように感じざるを得ないのです。

結びにあたりまして、観光研究所の開設以来、今日までの50年間、講座の講師をお務めになられた方々や直接運営に関わられた方々をはじめ、いろいろな形で関わられ、支えてこられた多くの方々に心より感謝したいと思います。さらにその前には、観光研究所の開設に至るまでに関わられた、明治の時期、立教開学の時期からずっと直接・間接に関わってこられた多くの方々がおりまして、この方たちの貢献によって、今日の立教の観光教育の下地が作られているのだということを理解しなければならぬと思います。そのことを今日改めて申したいと思います。

50周年を記念する会でございますけれども、それは50年間を振り返る会であるということだけではもちろんないわけです。振り返ることによって、さらに次に向けて動き出すということをする会でなければならないと思います。次なる50年に向けてスタートする年であり、スタートの会であるということをお願いしまして、私の話を終わらせていただきたいと思います。長時間ご清聴くださりありがとうございました。

(2018年1月20日
立教大学池袋キャンパス7号館7102教室)